

国際日本研究 フェローシップ ニュースレター

2015年6月発行 第2号

◎目次

招聘研究者が語る 日本での滞在研究	p.1
海外における日本文化研究の現在	
シドニー日本語教育国際研究大会レポート	p.6
オーストラリアにおける日本研究と日本語教育の連携	p.9
招聘期間中の研究活動	p.12
本フェローシップの受入機関	p.13
博報財団「国際日本研究フェローシップ」	p.16

博報財団

HAKUHO FOUNDATION

子どもたちと、未来のあいだに

博報財団「国際日本研究フェローシップ」は2006年の開始時から、海外で日本語・日本語教育に関する研究を行っている優れた研究者を日本に招聘してきました。滞在型研究の場を提供することで、世界における日本研究の基盤をより充実させ、研究者の活動を通して海外の日本への理解を深めることを目的としています。2014年の第9回招聘からは、日本文学・日本文化領域も招聘対象とし、より広い範囲での日本研究の拡大と振興をめざしています。このニュースレターで、過去の招聘研究者インタビューや受入機関ごとの特徴紹介などから、日本で滞在型研究を行う魅力を感じていただきたいと考えています。

The Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship has invited international scholars of Japanese language and Japanese language education to Japan since 2006. The goal of the program is to enrich the foundation of international research on Japan and to promote a better understanding of Japan across the world by providing opportunities for international scholars to live and conduct research in Japan. In order to promote a wider scope of research on Japan, the eligible criteria for the fellowship were expanded in 2014 to include research on Japanese literature and Japanese culture, in addition to research on Japanese language and Japanese language education. This newsletter includes interviews with former fellows and information on the characteristics of hosting institutions, and illustrates various benefits and advantages of conducting research through an extended-stay in Japan.

日本を学ぶ、日本で究める

招聘研究者が語る 日本での滞在研究

博報財団「国際日本研究フェローシップ」により日本滞在研究を行った研究者は、第10回までで32ヶ国・地域にわたり、研究者同士の連携を生み出している。ここでは、4人の招聘研究者の研究内容と日本滞在研究の成果を紹介する。

Over the past nine award periods of Hakuho Foundation Fellowships, scholars from 32 countries and regions have come to Japan to conduct research, generating scholarly cooperation. This section presents the various themes and outcomes of the research projects conducted in Japan by four former Hakuho Foundation fellows.



対照研究から日本語教育の 質的向上を目指す

デディ・ステディ DEDI Sutedi

インドネシア共和国 インドネシア教育大学 言語芸術教育学部 日本語教育学科 准教授

[研究タイトル] 日本語の受身とインドネシア語の受身との対照研究

[招聘期間] 2013年10月1日～2014年9月30日

[受入機関] 東京外国語大学

インドネシアの日本語学習者

インドネシアは日本語の学習者が多い。その理由は、日本は海外での日本語教育に対して関心が高く、外国人のための制度が整っているためだとデディ先生は語る。留学するチャンスがほかの外国語に比べてたくさんあることが大きな動機になっているのだ。

学習者の大部分は高校生で、デディ先生自身も高校時代に第二外国語として日本語を選択したことがきっかけだそう。『五輪真弓の『雨宿り』や『心の友』を聴いて、そこから興味が出てきたんです。歌詞の内容が知りたくて、自分で辞書をひいたけれど、初級レベルを学んだくらいではわからなかった。先生に聞いてもよくわからないと言われてがっかりして、じゃあ自分が良い日本語の先生になろう、

と思うようになったんですね」

シンガーソングライターの五輪真弓の楽曲は1980年代にインドネシアをはじめ東南アジアで流行した。いまでも根強い人気があり、スマトラ島沖の地震の際にも被災者の支えになったと言われている。

インドネシア語干渉からの 誤用を減らす

デディ先生は、母国の日本語学習者に受身の誤用が目立つことに気がついた。「たとえば、学生は平気で『私は山本先生に日本語を教えられた』と言います。文としてはまちがっていないけれど、迷惑とか厳しいという印象を与えてしまいますよね。でもインドネシア語ではこの受身のかたちで尊敬や感謝を表すのです。

こうした誤りはコミュニケーションのうえで危険です」

原因は、現行の日本語教科書に載っている受身の種類が少ないことにある。「日本語の受身＝インドネシア語の受身の『di-動詞』構文」と単純に考えてしまっているからだ。デディ先生は両方の共通点や相違点がわかれば誤用を減らすことができると考え、対照研究を行った。日本語の受動文を19のパターンに分類し、同じ観点でインドネシア語の受動文を22パターンに分類した。そして、対応するものとしなないものを母国の学習者の観点で難易度分けをしてシラバス案を作成した。「この案をもとに会話、読解、作文のそれぞれの先生方とチームを組んで、新しい教科書づくりにあたる計画です」

国内唯一の教育大学で教鞭をとるデディ先生は自身の使命を次のように語る。「うちの学生には、自分が日本語でコミュニケーションできるだけではなく、日本語をほかの学習者に教えられることが求められます。そのためのカリキュラムを作りたい。教育者を育てるために、より厳しい基準での日本語教育を目指しているという。

日本滞在で得られた経験

デディ先生は今回の滞在では最新の研究成果や論文などの資料にあたる機会を得たそうだ。「とにかく文献が豊富です。日本語の言語学には、構造言語学から生成文法、機能的文法、最近の認知言語学

などのすぐれた先行研究がたくさんあります。それを日本語教育にもっと活用できればと思っていますが、インドネシアではそういった文献が手に入りません」

また、今回の招聘で東京外国語大学（以下：東外大）で研究できたことは、対照研究の非常に大きな収穫になったと語る。東外大にはインドネシア語専攻があり、様々な言語と日本語との対照研究も盛んだ。「インドネシア語専攻の降幡正志先生は、私の母語であるスダ語も研究しています。インドネシアではインドネシア語は共通語で、母語は地域により別々なんです。降幡先生には日本語とスダ語の敬語の研究と一緒にやろうと誘われました。おもしろいテーマになると思います」。院生や他の研究者とインドネシア語について議論してはじめて気づいたこともあるという。「直感的にはわかるのですが、どう説明していいのかわからないことがありました。こうしたことは今後の対照研究に活かして行こうと思います」。東外大の研究会は頻繁に行われ、デディ先生は好きなテーマを見つけるとよく出席したという。また、招聘期間中に大阪大学や政策大学院大学での発表の機会も得たという。ワークショップでは、1年間の研究の内容を発表した。「参加者には、インドネシア語の研究者はもちろん大学院生や、マレーシア語やフィリピン語の研究者、また日本語学の研究者もいます。彼らとのディスカッションを通じて、いろいろなアイディアが出ました」



帰国後には今回の研究の成果をまとめた“Kalimat Pasif Bahasa Jepang: Kajian Sintaktis, Semantis, Pragmatis, dan Konstratif, serta Implikasinya dalam Pengajaran (統語論的・意味論的・語用論的・対照的観点から見た日本語の受動文とその日本語教育への応用)”が出版された

Improving the Quality of Japanese-Language Education through Contrastive Research

Professor Dedi has conducted contrastive research of passive sentences in Japanese and Indonesian. Indonesian speakers who study Japanese frequently make mistakes in passive sentence constructions, as existing textbooks insufficiently explain the similarities and differences between such sentences in the two languages. He has classified passive sentences in Japanese and Indonesian into 19 and 22 patterns respectively, and has compared them in designing syllabi for Japanese language courses from the perspective of Indonesian speakers. He plans to develop the syllabi into a textbook in collaboration with his colleagues. Conducting research in Japan allowed him to access a large amount of material on relevant research that is inaccessible from Indonesia. Working with scholars in Japan also led him to new discoveries and offered possibilities for future collaborative research. Indonesia has a sizable population of Japanese-language learners, and as a faculty member at the only teachers' university in the country, he hopes to provide rigorous Japanese language instruction to foster competent future teachers of Japanese language in Indonesia.



「翻訳」を通じて近世後期の政治・思想を読み解く

堀内・アニック・美都 HORIUCHI Annick Mito

フランス パリ・デイドロ大学 東アジア言語・文化学部教授

【研究タイトル】西洋の世界地理学・歴史学が近世後期日本の政治・思想に及ぼした影響

【招聘期間】2014年9月1日～2015年2月28日

【受入機関】早稲田大学

数学から科学史、歴史学、そして地理学へ

本フェローシップは第9回以降、対象領域を従来の日本語・日本語教育研究から、日本文学・日本文化研究まで広げた。堀内先生はその文化研究部門での初の招聘者の一人にあたる。

日本で生まれ育った堀内先生は、高校卒業以降フランスに移り住み、大学では数学

を専攻していた。だが、同時に、日本語・日本の知識・文化についてもっと学びたいという思いを持っていたという。「数学と日本」の両方に親しい経歴を持つ人間は少ないと考え、中国数学史の研究者らにも後押しされ、大学院では日本の和算、関孝和と建部賢弘という江戸中後期の二人の数学者について研究をはじめた。数学という理系の世界から数学史、科学史を通して文系の世界に足を踏み入れた堀内先生。儒教や日本の思想史についても研究分野を広げ

るなかで、今回の滞在研究では政治とも深くかかわる近世の地理学に焦点を当てた。

「日本の地理学を考えるときには、『翻訳』が非常に重要なんです。鎖国期に入ってきた西洋の地理書を蘭学者が翻訳することで、日本の地理学が始まるわけですが、翻訳というものが、その後の日本の政治思想・経済思想にどういった影響を及ぼしているのかを深く研究したいと考えています。実際に翻訳を読んでみるとかなり要約されていて、翻訳者の興味があるところが中心になっているんですね。彼らの個性のようなものを感じます。そういったことを考慮に入れて研究しようと思っています」

近世地理学では鮎沢信太郎氏の残した非常に優れた先行研究があり、専門的な学問として掘り下げられている。けれどもその政治的な影響などは十分に研究が尽くされていない。その理由のひとつに

「翻訳」の問題があるのではないかと堀内先生は考えている。原文をもっと解析し、その中に含まれる思想と、日本語に訳されることで失われること、逆に何が訳者の興味の対象になっているのかを把握することが必要で、そのためにもいまオランダ語も学んでいるところだという。「それこそ、蘭学を習っていた日本人みたいな感じで。彼らの気持ちがよくわかります」

近世地理学の研究を通じて、19世紀後半の政治の土台となった世界観、アジア観の理解に貢献できればと考えているという。

貴重な資料と人的交流

受入機関である早稲田大学の図書館には、言語学者の杉本つとむ氏が蒐集した資料が豊富にある。デジタル化が進んでフランスでも閲覧することは可能なのだが、堀内先生が同僚とともに「塵劫記」という古い数学の本についての研究書を著した際に、早稲田大学図書館にある貴重な原典を見られたことが印象に深いそうだ。堀内先生の研究にはそれ以外にも、鮎沢氏の蔵書がある横浜市立大学、蘭学者の大槻玄沢が持っていた資料を保存する静嘉堂文庫、江戸幕府の公文資料が多く保管されている内閣文庫など、実際に日本に来なければ得られない資料にあたるのが欠かせない。そのため、今回の滞在中にも何度も足を運んでいるという。

また、蘭学史についての研究者も圧倒的に日本に集中している。たとえば長崎の通事の志筑忠雄という人物の資料についても、日本にいる研究者がそれぞれが集めたものについて情報交換をするなど、日本での人的な交流もこの研究には欠か

せないとする。

早稲田大学での受入担当である谷口眞子准教授とは今回の招聘ではじめて知り合ったそうだが、東京大学の史料編纂所の勉強会にも一緒に参加し、谷口先生の主催するシンポジウムにも出るなど、非常に刺激を受けているという。また、上智大学での勉強会には、アメリカからの滞在研究者も出席していて、研究スタイルの異なる多くの近世の研究者とも交流を重ねている。

今後の日本文化研究のあり方

堀内先生が教鞭をとるディドロ大学は、パリではイナルコ（フランス国立東洋言語文化研究所）に並び日本語教育が盛んな機関だ。フランスでは中等教育で日本語教育が盛んでない分、大学では最初から日本への関心と知識を持つ学生が日本語を学びにくるという。学生の関心の対象は言語学・歴史・文化と多岐にわたっているが、一番多いのは、漫画・文学・映画・アートなど日本の文化だという。「ただ、世界に発信されている日本の文化と、実際に日本を訪れて目に入るもの、感じるものとは、少し違うと思うんです。たとえば技術史や、日本のものづくり、職人の仕事などを研究する学生が増えてほしいと願っています。デパートの歴史、ものの売り方、サービス業についてなど、結局日本に来るとそういうものがいちばん目につくんです。それらをもっと研究したらおもしろいと思います」

先生自身、専門的な領域での研究と同時に、パリの日本文化会館などと協力して「いまの日本」を積極的に紹介したいと考えているという。



左から馬場貞由「帝爵魯西亜国志」、前野良沢の「魯西亜本紀」、堀内先生の著作「Listen, Copy, Read: Popular Learning in Early Modern Japan」

Deciphering Early Modern Japanese Politics and Thought through Translations

The eligible research criteria for the Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship expanded beginning with the ninth award period, and Professor Horiuchi was one of the first scholars to receive the fellowship to conduct research on Japanese culture.

Born in Japan, Professor Horiuchi moved to France after graduating from high school. Having majored in math as an undergraduate, she combined her interests in math and Japan in her graduate studies in History of Science, and conducted research on Japanese mathematicians of the Edo period. During her fellowship period, she focused her research on the study of geography in early modern Japan. Closely examining original Dutch texts on geography that early modern Japanese scholars had translated into Japanese, she analyzes how the process of translation influenced the development of ideas concerning politics and economics in Japan.

While conducting research in Japan, Professor Horiuchi examined primary texts that are not available through online resources. She also found it valuable to engage in scholarly exchange in Japan, where most of the researchers who examine aspects of Dutch Studies in early modern Japan are based. Whereas many students in France are interested in Japanese literary and visual arts, she hopes that more scholars will explore other aspects of Japan that have not been studied extensively, such as histories of technology or the service industry.



社会言語学から日本語コミュニケーションの可能性をさぐる

東照二 AZUMA Shoji

アメリカ合衆国 ユタ大学 言語文学部教授

【研究タイトル】「グローバル化は、日本語コミュニケーションのスタイルを変えているのか? : 日本における政治・ビジネスリーダーたちのスピーチ・スタイルの分析」

【招聘期間】2013年10月1日～2014年8月31日【受入機関】国立国語研究所

日本語におけるコード・スイッチ

日本の大学の学部生時代には英文学を専攻していた東照二先生。ジェイムズ・ジョイスの作品などを通じて言語を中心に文学を見るというアプローチから、言

語学に関心を持つようになったという。

東先生の研究する社会言語学には、二つ以上の言語変種の切り替えを行うコード・スイッチという考え方がある。多言語社会であるアメリカでは、公的な言語である英語とそれぞれのコミュニティの言語とを切り替えることで、フォーマル

な感じを出したり、親しみを示したりするという。東先生はその考えを発展させ、異なる言語間のスイッチではなく、日本語のなかで、公的な「ソト」の言語と私的な「ウチ」の言語というスタイルのスイッチに着目した。「社会的な機能はまったく同じでも、そのスイッチによっていろんな人間関係を作ったり、自分のイメージをよくしたり、会話を発展させる働きがあるんです」

また、日本語の授受動詞の使い分けにもそのスイッチが適用できるという。「My

father gave a book to my mother. これを日本語で言う場合には『父が母に本をあげた』と『父が母に本をくれた』というふたつの言い方があります。言語学者の牧野成一先生によると、英語だと give だけですが、日本語では父と母どちらに共感を覚えながら言うかによって、動詞が異なってくる。そういう感情、あるいは人間関係を反映する日本語の文法やしぐみに興味を持ったんです」

フィールドワークが欠かせない

なかでも東先生は、政治やビジネスのトップに立つ人間のスピーチに注目した。もはや利益誘導型ではない今の政治家にとって、武器は「言葉」だと東先生は考える。多くの人の共感を得て興味関心を惹きつけるだけでなく、なんらかの行動を起こさせるために、政治家はどのような言葉の使い方をするのか。「都知事選の街頭演説には毎日行きました。演説を聞くのも大事なんです、演説の抑揚や間合いにどう聴衆が反応しているか、どこで拍手をするか、どういう掛け声をするか、そういった背景や臨場感は現場に行ってみないとわからない。図書館で本を見ながら研究する人もいますが、僕の場合はこのフィールドワークが最も重要です。だから日本に来ないとダメなんです」

東先生は、グローバル化とは英語を話せるようになることではなく、聞き手に響くような公的言語を操れることだと考え、そうした観点からもフィールドワークを重ねた。企業にも足を運び、朝礼が公的な言語のトレーニングの場として日本の会社では大切な位置づけにあることも痛感したという。さらに、福島や宮城も訪れ、東日本大震災に関連する様々なポスター

やスローガンを収集した。それらは現在の日本の公的言語の問題点とあるべき姿を模索する研究に活かされるそうだ。

共時的から通時的な視点へ

今回の滞在では、東先生の研究に最も重要なフィールドワークに加えて、研究会での発表や他の研究者との有意義な交流ができた。さらに、思いがけず興味深いデータを収集できたという。とりわけ、受入機関の国立国語研究所で相澤正夫先生の「現代日本語の動態の解明」というプロジェクトが集めた資料にアクセスできたことが大きいそうだ。「永井柳太郎、尾崎行雄、大隈重信といった大正時代の政治家の演説の音声データを得られました。今回の招聘で外来研究員として相澤先生の研究チームに入れたからです。いままでは共時的なデータの収集と分析が主でしたが、通時的、歴史的な流れのなかで日本語のスピーチのスタイルがどう変わってきているかという材料を集めることができました」。その結果、日本でスピーチという概念が生まれてから政治家がスピーチをどのように捉え、大正・昭和・平成を通じてどう変遷してきたかを研究する、大きなプロジェクトのきっかけを得たという。政治学者の日本政治史研究や、社会学者の日本思想史研究などはたくさんあるが、言語に特化した政治家の言葉の研究はほとんどない。「国民はどのように政治の言葉と対峙してきたのか、それを考えるという意義のあるプロジェクトではないかと、われながら思っています」

東先生が所属するユタ大学には、学部を超えたアジアセンターという部門がある。今回の滞在研究をきっかけに、ここでの新たなコースの開設も計画して

いるそうだ。「社会学や歴史学、政治学などの他分野の研究者と学部をまたがり刺激しあえるような、日本の言語史のコースとなるはずですよ」



第8回招聘中に上梓された著書『なぜ、あの人の話には耳を傾けてしまうのか?』(光文社新書)。小泉純一郎元首相のスピーチやプロゴルファーの石川遼選手の言葉を分析し、日本語のコミュニケーション能力のあり方について考察している

Exploring the Prospects of Japanese-Language Communication through Sociolinguistic Perspectives

Professor Azuma has applied the sociolinguistic theory of code switching between two languages to analyses of differentiated use of in-group (*uchi*) and out-group (*soto*) modes of speech, as well as the use of different benefactive verbs in Japanese. In particular, his research has focused on speeches given by political and business leaders. He observed political speeches on the street and corporate morning-assembly speeches while in Japan. He also collected posters and slogans concerning the 2011 Great East Japan Earthquake. Fieldwork in Japan is essential for his research, as he examines not only the text of a speech itself, but also the context and atmosphere of the speech through the text of the speech itself, but through the intonation and pauses that are used by the speaker, as well as the reactions of the audience. Conducting research in Japan also provided him with opportunities to exchange ideas and partake in collaborative research with scholars in Japan, leading him to explore his research topic through a historical perspective. He also hopes to create a new multi-disciplinary course at his home institution based on his research in Japan.



慣用語句の背景にある 日本文化・思想をたどって

フレンツ・ロディカ・モニカ FRENT Rodica Monica

ルーマニア バベシュ・ボヤイ大学 文学部東洋学科学科長

【研究タイトル】日本語・ルーマニア語における慣用語句の持つ文化的な意味の比較・対照研究

【招聘期間】2014年9月1日～2015年2月28日

【受入機関】早稲田大学

漢字学習のための手段から より創造的な世界へ

フレンツ先生はバベシュ・ボヤイ大学

で、ルーマニア語の歴史について教鞭を取っていた最中に文部科学省の奨学生として日本語を学び始めたという異色の経歴を持つ。それまで、日本の寺社を紹介した本や、ルーマニア語に翻訳された川

端康成の作品などを読み関心はあったが、日本語を学ぶ機会はなかった。当時の学部長が、ヨーロッパの多くの言語に精通した言語学者であるフレンツ先生にこの文科省のプログラムを薦め、先生は神戸大学で「かな」から日本語を学び始めることとなった。効率よく漢字を習得する手段として習字をならいはじめたところ、しだいに書道の世界に魅入られたのだという。「繰り返し書くという記憶力の領域を超えて、書道ではより深く、漢字の背景にある文化や思想にも触れられます。夢中になりました」。先生はルーマニアに

帰国後、書道に関する書物も著し、個展も開催した。

フレンツ先生は帰国後 2008 年に日本語専攻科目を設立し、バベシュ・ボヤイ大学はいまやブカレスト大学に並ぶ日本語教育の代表的な機関になっている。日本語を教えるかたわら、日本小説の翻訳や日本文学の研究にも精力的に取り組んでいる。

慣用句から日本文化を学ぶ

慣用句の対照研究を本招聘の研究テーマに据えたフレンツ先生。大学では日本語初・中級の学生に教えるために、既成の日本語教科書を使用している。テキストは、語彙や文型からみると学習者が出来るだけ早く日本語の特徴に慣れるように構成されているが、慣用句を総合的に扱う章がない。フレンツ先生はその理由を、慣用語句が音声学・語彙・文法・意味それぞれの境界領域にあるからだと考えている。そのような欠如部分を補うために、日本語・ルーマニア語の慣用語の多くの実例を踏まえ、慣用語に関する言語学の理論を応用して、新たなシラバスを作成することができれば、学生たちの日本語学習の有効な手段になるだろうと語る。慣用語を学ぶことは、習った語彙と文型の復習だけでなく、背後に存在する日本文化や日本人の行動様式や事物の捉え方、認識の仕方を学ぶ、清新なアプローチともなると先生は考えている。日本から距離的に離れており、容易に訪ねることの難しいルーマニアの学習者が、日本語とルーマニア語の比較対照を通じて、日本と自国両方の文化の理解を深められるようになるシラバスの作成を目指しているのだという。

「『茶』と『間』にまつわる慣用語が興味深いです。『茶々をいれる』『お茶を濁す』『お茶の子さいさい』『間が良い』『間が悪い』『間が抜ける』という例を学習者に挙げると、日本人の心に少し深い度合いで接触することができるのではないかと考えています。こうした慣用語を使いこなすには、せん茶、抹茶、茶の湯や日本古来の劇や音楽に見られる『間』などの意味を理解することが必要となります。慣用語を学ぶことが、日本語あるいは日本文化について問いかけはじめる機会となることは間違いありません」

言葉のタイムトラベル

受入機関の早稲田大学では大学院日本語教育研究科の宮崎里司教授及び小宮千鶴子教授の講義やゼミ等に出席した。それ以外にも、愛媛大学の日本文化体験プログラムや大東文化大学のシンポジウム等に参加したり、東京大学、東京外国語大学、昭和女子大学等の研究者と研究テーマについて話し合うなど、積極的な交流を持った。「とてもよい刺激を受けました。ルーマニアでは日本語母語者と話す機会はほとんどありません。日本語での日常会話で、慣用語がどのように用いられているのか、どの程度で取り入れられているのか、体験に基づいたデータも得られます。たとえば『茶々を入れる』という慣用語は若い世代はあまり使わないと聞きました。そうしたことは文献を読んでいるだけではわからないのです」

また、研究は理論的側面と実際のデータ収集という二つの段階から構成されているため、慣用語そのものだけでなく、日本文化や日本文学等にまつわる参考文献を参照することが不可欠ののだが、ルーマニアでは日本語の本を入手することが非常に難しい。この滞在中に今年刊行された最新の慣用語に関する研究書を含めた多くの書籍を入手できたことや、大学図書館で膨大な資料にあたれるのも大きな喜びだという。

慣用語を研究するのは、タイムトラベルのようなものだと言います。フレンツ先生は語る。「江戸時代から伝えられてきた『油を売る』という慣用語から現在の『消しゴムの悲しみ』という表現にいたるまで、慣用語は過去の世界、あるいはまだ見ない新しい世界へ、私たちを連れていってくれます。慣用語のなかでは、意味が知識、感情、文化とこだまするかのように響きます。慣用語は音声言語的にも、文字言語的にも、文化というものを活性化する意味を持っているものとしてとらえ直すことができるわけです」



招聘期間中にはルーマニア大使館で書の個展「瞬間の記憶」も開催された

Tracing the Thought and Culture Behind Idiomatic Expressions

Professor Frent received a Japanese government fellowship to begin studying Japanese in Japan when she was teaching the history of Romanian language at Babeş-Bolyai University. After returning to Romania in 2008, she established at Babeş-Bolyai University what has now become one of the major Japanese programs in the country. Currently she teaches Japanese, while also translating and conducting research on Japanese literature.

During her Hakuho Fellowship period in Japan, Professor Frent focused on the comparative examination of idiomatic expressions in Japanese and Romanian. Japanese language textbooks used in Romania lack comprehensive treatment of idioms. She hopes to create teaching materials that introduce Japanese idiomatic expressions through comparative perspectives that can provide a deeper understanding of both Japanese and Romanian culture.

While conducting research in Japan, Professor Frent attended seminars and symposia, engaged in scholarly exchange, and collected data on idiomatic expressions through everyday conversations in Japanese. She was also able to obtain new Japanese publications that are difficult to acquire from Romania, and was thrilled to have access to large numbers of materials for her research at university libraries.

Professor Frent considers idiomatic expressions a type of “time machine” that can provide insight into the past and the future, reflecting the knowledge, emotions, and culture of the society in which they are used.

海外における日本文化研究の現在

本フェローシップは、2006年の開始以来、海外で日本語・日本語教育研究、および日本文学・日本文化研究に携わる研究者を日本に招聘して、支援しつづけている。研究者の出身・所属は世界的な広がりを見せる。その研究テーマも手法も多様だ。いま、世界各地でどのような研究が行われているのか。

今号はオーストラリアを取り上げる。オーストラリアは世界有数の日本語学習者数をもち、2014年7月にはシドニー日本語教育国際研究大会が開かれた。大会取材し、オーストラリアの日本研究をリードする研究者に話をうかがった。そこから、オーストラリアで進む研究の動向と、日々研鑽される語学教育の手法と教材、そして日本研究と日本語教育が連携する重要性、日本での滞在研究の意義が見えてくる。

The Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship has invited scholars of Japanese language, language education, literature, and culture from around the world to conduct research in Japan. The regional and disciplinary backgrounds of the fellows have continued to diversify, and so have the themes and methodologies of research supported by the fellowship. This edition of the Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship Newsletter focuses on Australia, and explores the characteristics of research and language education in the country. It also addresses the importance of the collaborative link between Japanese Studies and Japanese Language Education, and the significance of conducting research in Japan.

シドニー日本語教育国際研究大会レポート

日本語教育と日本研究をつなぐ画期的な大会

2014年7月、シドニーで日本語教育国際研究大会（SYDNEY-ICJLE2014）が開催された。シドニーではこれが2回目の大会になり、過去には東京、ソウル、天津、ニューヨーク、釜山、台湾、名古屋で行われている。世界中の日本語教育関連の研究者が800人も集まる大規模のものだ。

今大会のテーマは「つながりとコミュニティ」。このテーマは、小中高校の日本語教師を総括する全豪日本語教育シンポジウム（National Symposium on Japanese Language Education 2014）と同時開催したことに反映されている。大学の研究者と小中高校の教師が集まって相互の連携をめざす、画期的な研究大会になった。オーストラリア・シドニー近郊にある6つの大学がつながり、協力することで実現したものだ。



上▶大講堂で行われた開会式挨拶の様子
左下▶大会会場であるシドニー工科大学
右下▶ニューサウスウェールズ大学のトムソン木下千尋教授（日本語教育研究）

つながりを重視した大会プログラム

会期は7月10日から12日。会場はシドニー市内中心部のシドニー工科大学。大講堂からポスター発表をするロビーへ、そしてパネル発表を行う教室へと人々が行き交い、活気に溢れていた。

基調講演は、ケント・アンダーソン先生（アデレード大学〔当時〕）らが行う。アンダーソン先生は、オーストラリアの日本語学習ブームの要因として、80年代～90年代にかけての日本の経済成長・政治的ポジションの向上を挙げる。現在、オーストラリアでは、日本語がどの教育機関でも人気のある外国語になった。しかしながら、その現状に満足して、強く働きかけなくとも学生は日本語を学ぶだろうと見込むのではなく、学生へ積極的に日本語学習を奨励してゆくことが重要だと語る。

日本語教育と日本研究が連携すべく企画された講演を8人の研究者が行う。オーストラリアの日本語教育の精髓ともいえる、卓越した日本語による講演だ。「つながり」というテーマはここでも活かされ、近い分野の研究者が集い、交流を深めるためのフォーラムも開かれる。

大会運営委員長のトムソン木下千尋先生（ニューサウスウェールズ大学。本フェローシップ第5回・第9回招聘研究者）はこう語る。「日本語教育はその分野内に『談話』『習得』『教材』など、多様なテーマを持ち、それぞれが言語学、教育学をはじめとした様々な隣接分野の研究に支えられ、成り立っています。日本研究の諸分野も大切な隣接分野です。各分野、テーマの内外でのネットワ



上▶ロビーでモーニングのお茶会。世界中の研究者の間で情報交換が行われる

ーキングは研究や実践に深みをもたらす大切な『つながり』だと考え、10日には各テーマのフォーラムの場を提供しています」

博報財団もブースを出展し、広報に務めた。滞在研究を望む多くの研究者と出会い、過去に招聘した研究者と再会した。また、外国人向けの漢字学習辞典のイスラエル人編纂者や、日本語の達人な女子高生を連れた現地の教師などもブースを訪れ、大会の活況を感じさせた。

オーストラリアに特徴的な日本語教育研究

大会プログラムには、移民大国オーストラリアの特色が見られる。多文化コミュニケーションに関する発表、多言語による会話分析の発表が行われる。

実際、日本語学習者の背景は多様だ。漢字圏からの移民の子弟が多い一方、非漢字圏の学習者も一定数いる。アジア諸国からの留学生も多い。専門分野も、日本研究からアジア研究、エンジニアリングやITまで幅広い。

オーストラリアではダブル・ディグリー（コンバインド・ディグリー）という制度が普及しているため、複数学位を選択できる点も大きい。一般的には人文社会科学部におかれることの多い日本語プログラムだが、学習者の事情に合わせて、シドニー工科大学などの工学系の大学・大学院でも充実している。モナシュ大学のロビン・スペンス-ブラウン先生によれば「現在、高校生を調査しているところですが、予想と異なり、約半数が理系です」と語る。

スペンス-ブラウン先生は、オーストラリアで日本語が盛んになった社会的な要因を次のように説明する。まず、日豪関係の緊密化が挙げられる。仕事を探そうえでも有利だという経済的な要因も大きい。また、オーストラリア政府による外国語政策も関係している。ほかにも、グローバル化により、日本に関するニュースを見たり、日本に旅行したりする機会が増えたこともあるという。社会レベルを見ると経済的に合理性のある要因が見出せる一方、個々人の動機を尋ねると、日本語や、マンガ・アニメといったポップカルチャーが好きだからという理由を挙げる人が多い。食と芸能と武術といった伝統文化も魅力のひとつだと語る。

もう一つの特色が、初等中等教育から日本語を学ぶ児童が多いことだ。大会では、マレー・ファーム公立小学校の1・2年生が日本の童謡を合唱した。同校は、ニューサウスウェールズ州教育・地域社会省が推進するアジア言語学習促進計画の一環として設立された、バイリンガル4校のうちの1校として、2010年から、日本語バイリンガルプログラムを実施している。

さらなる特徴として、継承語ワークショップがある。継承語とは、子どもの育つ環境で使う言葉（オーストラリアでは主に英語）とは異なる、親から受け継いだ言葉（ここでは日本語）をさす。トムソン先生はワークショップ開催の意義を、シドニーの日本人コミュニティで継承語教育に携わる人々と、研究者のつながりに見出す。継承語話者の言語運用能力にはばらつきがある。会話はできるが読み書きができない人もいれば、その逆もいる。各教育レベルにおける継承語話者が置かれている状況と、教育支援のための方策について議論され、さらに言語力・文化・コミュニティ・家庭環境に焦点をあてた研究の蓄積と、それを踏まえた提案がなされる。

この大会の運営を影で支えていたのが、青いTシャツを着た学生ボランティアたちだ。その多くが、トムソン先生が教鞭をとる

ニューサウスウェールズ大学の学生である。トムソン先生は「運営委員長として、学生の役に立つ大会にしたかったんです。学生に機会を与えて、実際に日本語を使って達成感がある部分を大会に盛り込みたいと思っていました」と語っている。自身の講演で、実践コミュニティの重要性を語ったトムソン先生ならではの運営方針だ。

次のページからは、オーストラリアの日本研究をリードする方々に、日本語教育と日豪の歴史の蓄積と、現在までの工夫と取り組み、そして今後の課題をうかがった。

ここで紹介しきれなかったプログラムを含め全プログラムのタイトルと発表者、および基調講演・特別講演の要旨とスライドが、大会ウェブサイトで見ることができる (<https://icjle2014.arts.unsw.edu.au/jp>)。



左▶モナシュ大学のロビン・スペンス-ブラウン上級講師（応用言語学）

右▶アデレード大学（当時）のケント・アンダーソン教授（法学・日豪関係・高等教育政策）



上▶ポスター発表会場。メモを取りながら熱心に聴き、質問や議論が活発になされる
下▶教育管理システム Moodle（ムードル）による小テストの出題。Moodleに関するポスター発表も行われた。写真提供：国際教養大学日本語プログラム・橋本洋輔先生

International Conference on Japanese Language Education SYDNEY-ICJLE 2014

Connecting Japanese Language Education and Japanese Studies

In July 2014, the International Conference on Japanese Language Education (ICJLE) was held in Sydney, Australia, under the theme "Connections and Communities." The conference was held jointly with the National Symposium on Japanese Language Education, enabling 800 specialists of Japanese language education from across the world to come together with primary and secondary school teachers in Australia.

Focusing on Connections

Organized collaboratively by six universities in the Sydney region, SYDNEY-ICJLE 2014 was held at the University of Technology, Sydney. The eight-lecture series, presented in Japanese, addressed topics from both Japanese Studies and Japanese Language Education. The conference convener, Dr. Chihiro Kinoshita Thomson (University of New South Wales), notes that the field of Japanese Language Education encompasses diverse research themes, and is closely linked to various other fields, including Japanese Studies. In order to facilitate important "connections" among scholars with shared interests, forum sessions were held under a variety of themes. The Hakuho Foundation also participated in the conference by setting up a PR booth.

Characteristics of Research on Japanese Language Education in Australia

The conference program reflected the characteristics of Australia as a country with a large number of immigrants. Many presentations discussed multi-cultural communication and analyses of conversations involving multiple languages. Japanese-language learners in Australia come from diverse backgrounds, including second-generation immigrants and students from Asian countries. They also pursue various fields of study, from Asian Studies to Engineering, facilitated in part by double-degree programs offered at Australian universities. According to Dr. Robyn Spence-Brown (Monash University), social factors that have contributed to the rise in the interest in Japanese language include increasing links between Japan and Australia as countries, economic prospects, the Australian government's foreign language policies, and globalization. On a personal level, many students note their interest in Japanese popular culture such as manga and anime, as well as food, performing arts, and martial arts. Australia also has many students in primary and secondary schools who study Japanese, showcased at the conference by a singing performance of Japanese folksongs by first and second graders from a local school with a Japanese-medium bilingual program. The conference also hosted a heritage-speaker workshop to promote connections between specialists of heritage-

language education and the Japanese community in Sydney. Participants discussed circumstances of Japanese heritage speakers at different educational stages, and suggestions were made based on research on language abilities, culture, community, and home environment. Students from the University of New South Wales worked as volunteer staff for the conference, reflecting Dr. Thomson's emphasis on "communities of practice" for language learners.

For further details on the conference, see: <https://icjle2014.arts.unsw.edu.au>



左上▶発表に向かうマレー・ファーム公立小学校の児童たち
右上▶大会運営に関わる、青いTシャツを着たボランティア学生たち
中▶会場ロビーにてランチタイム
下▶大講堂外に設置した博報財団ブース

column 世界中から集まった博報財団の招聘研究者

大会には、過去に本フェローシップで日本に招聘されたことのある研究者と、これから招聘予定の研究者が参加していた。

尹鎬淑先生(韓国・サイバー韓国語大学校)と豊田悦子先生(オーストラリア・メルボルン大学)はどちらも第9回招聘研究者。これから日本で滞在研究をはじめめる期待を語ってくれた。

一方、第5回招聘の永野マドセン泰子先生(スウェーデン・国立イェテボリ大学)、第7回招聘の唐磊先生(中国・課程教材研究所)も日本滞滞研究を活かした発表を行う。

第3回招聘のアグス・スヘルマン・スルヤディムリア先生(インドネシア・国立バジャジャラン大学)は、次回2016年日本語教育国際研究大会(インドネシア・バリ島)の運営委員長をつとめる。インドネシアの日本語学習者は世界2位。やはり学習者の増えているベトナムをふくめ東南アジアでは、初めての国際大会になる。この大会は、インドネシアで使われる数百の公用語・地域語とは大きく異なる日本語を教え、学んできた蓄積を周知する機会になり、今後の日本語教育に新たな知見をもたらすだろうと意義を語った。

Hakuho Foundation Fellows Converge From Around the World

Participants at ICJLE 2014 included former and incoming Hakuho Foundation fellows. Former fellows presented on research that has been enriched by their fellowship experiences in Japan, and new fellows shared their hopes for their upcoming research in Japan. Dr. Agus Suherman Suryadimulya (Universitas Padjadjaran), a former Hakuho Foundation fellow (2008-9), is the convener for the next ICJLE in 2016 in Bali, Indonesia. Indonesia has the second largest population of Japanese-language learners in the world, and the conference will be the first ICJLE to take place in Southeast Asia.



インドネシア国立バジャジャラン大学のアグス・スヘルマン・スルヤディムリア教授(写真左、比較語彙研究)が次回の大会委員長を務める。日本の大学に留学中のヘニ・ヘルナワティさん(写真右、日本語学)と

オーストラリアにおける 日本研究と日本語教育の連携

初等中等教育から日本語を学ぶ

オーストラリアの日本語学習者数が世界4位になったのは、1980年代後半にはじまる日本語学習ブームの影響が大きい。「TSUNAMI」とも呼ばれたブーム時には、全国の大学に日本語プログラムが新設され、1年で学習者数が倍増したともいわれる。その背景には、日本の急速な経済発展にともない、商業・法律・政府関係といった実用的な日本語が求められたことがあった。

そもそも1960年代にオーストラリアは、従来のヨーロッパ志向からアジア志向へと転換しつつあり、近年の「学校におけるアジア語・アジア学習推進計画」(NALSSP、2008-2009年度から2011-2012年度にかけて実施)に至るアジア言語政策が存在する。

その結果、日本語はメジャーな言語として定着した。オーストラリアでは、学校で日本語が教えられているのが「普通のこと」であり、学習者の数は着々と伸びていった。

学習者の内訳を見ると、大半が初等中等教育で学んでいる。これは世界的な傾向で、全体の57%に当たる。ところが、オーストラリアの場合、96%が初等中等教育機関に集中している。授業では、異文化体験として日本語の挨拶を学んだり、日本の伝統文化に触れたりするのに加えて、日本とオーストラリアの小学生同士がスカイプを使って交流することもある。高校でも、日本語は人気トップの外国語だという。

実践と研究がつながる教育を

小中高校で日本語に触れて、大学でも学びつづける人は多い。言い換えれば、大学入学の段階で、学生たちは日本語の基礎をか

なり身につけている。学生のなかには、短期・長期の滞在をしたことがある者も少なくないという。彼ら彼女らが大学で日本語を学ぶ目的は、観光で役立てることに留まらず、専門的な場で使える力をつけることにある。

大学での日本語プログラムは、1917年にシドニー大学ではじまり、60年代にはオーストラリア国立大学などの6校でも設立された。日本語学習が大ブームとなる90年代までには、ほとんどの大学で日本語を履修できるようになった。

オーストラリアの日本語教育は、実践的なコミュニケーションに重点を置くという特徴がある。マッコーリー大学日本研究センターのディレクターである小山友子先生は、オーストラリアの語学教育の哲学を次のように説明する。「インターカルチュラル・コンピテンス(文化間対応力)が重要です。たとえば国際会議や企業広報で、文化の違いによる摩擦が生まれたときに、間に入ってクッションになれる人を育てることが目標です。『言葉を理解する』だけでなく、『文化を理解する』学生を教育するという考え方なんです」。学部生や院生に教えるための教材を開発しているのが、各研究分野の日本研究者である。

実践という点では、トムソン先生の「ジュニア先生」も興味深い。これは、3年生が学習プログラムの一環として初級クラスに参加し、1年生の手助けをするというものだ。「1年生数百人が受けている講義にも、ジュニア先生が待機して、一緒にコミュニケーション練習をしています。文法でわからないところや、授業以外の話題についても、日本語と英語で話せるんです」

実践を支えるのが、文化の理解、つまり日本研究だ。オーストラリアの日本研究でもっとも伝統あるシドニー大学のヤスコ・クレアメント先生は「語学と研究が単位に含まれているため、語学



左上▶マッコーリー大学の小山友子先生(異文化コミュニケーション・応用言語学)
左下▶マッコーリー大学

右上▶シドニー大学のヤスコ・クレアメント上級講師(近現代日本文学・比較文学)とリオネル・バビッチ講師(日本近代史・日韓関係史)
右下▶シドニー大学





左上▶ウーロンゴン大学のヴェラ・マッキー教授（日本史・ジェンダー研究）
中央▶オーストラリア国立大学のキャロル・ヘイズ上級講師（日本語教育・日本文学・映画メディア文化・多文化研究）
右▶デジタル・ストーリーテリング紹介ビデオと学生の作品。写真提供：ヘイズ先生

だけを履修して卒業することはできません。アジア研究のプログラムを受講する学生も日本語の授業に参加しています。アジア研究に限らず、日本語はあらゆる分野で必要とされています。たとえば、日本研究科に在籍する学生たちは法学部、医学部、化学、教育学、経済学、商学、音楽を専攻する学生たちが半数以上です」と語る。広範な日本研究を学ぶことについて、キャロル・ヘイズ先生（オーストラリア国立大学）はこう話す。学生たちの日本語能力で読める文献と、学生たちに知ってほしい議論には、ずれが生じてしまう。しかし、たとえば、国際関係論や貿易を専攻している学生にとって、たとえ日本史の研究書を読むのが容易ではないとしても、日本の歴史を知らないと、現在の政治と経済について議論はできない。だから、日本語で読めるようになるのが理想的であるが、英語または学生の母国語で書かれた日本研究文献から知識を得る必要もあるという。

ヴェラ・マッキー先生（ウーロンゴン大学）によれば、大学で日本語を学びはじめた学生は、3年生になる頃には会話ができ、辞書を引きながら難しい文章を読めるようになる。その時点では、専門的な議論を理解するまでは到達しない。さらに専門的に研究したい学生は、通常の3年間の学位に加え、1年かけて卒論を書き、オナーズという学位を取得する。こうした過程を経て、日本語で話す・書くといったコミュニケーションができ、英語に頼らず日本語の文献を読みこなし研究できる日本の専門家が養成される。そこにオーストラリアの日本語教育の力がある。

多様さを活かしたオーストラリア特有の日本研究

日本語学習者が多様であったように、日本研究と語学教育に関わる人々もさまざまな背景をもつ。研究者と日本語教師のどちらにも、オーストラリア出身の人もいれば、日本出身者を含む外国籍の人もいる。両者が情報をシェアし、サポートし合いながら日本語を教える。専門領域も多岐にわたり、日本語や言語学の専門家だけでなく、文学・歴史・国際関係などの専門家も関わっている。ここにも日本語教育と日本研究の連携を見ることができる。

広大なオーストラリア大陸をつなぐものに、学会がある。オーストラリア日本研究学会（The Japanese Studies Association of Australia）は隔年で開催し、国内外から日本研究の専門家を集い、協力体制を築いている。また、アジア研究学会（The Asian



Studies Association of Australia) も隔年に開催されている。

オーストラリアの特徴は、歴史的にも地理的にもヨーロッパとアジア（日本）の「中間」にある点だ。そのため、オーストラリアの日本研究は、アメリカとヨーロッパとアジアの日本研究者と活発に交流し、双方をつなぐ役割もある。また、各大学のアジア研究内の諸国・諸地域・諸言語とのつながりも見られる。

オンライン教材の積極活用

教材としては、コミュニケーションの機会を増やすべく、オンラインのものが活用される。Moodleという教育管理システムがある（P.7 右下の図参照）。オーストラリア全土で広く使われており、教材を配布・閲覧し、授業課程を説明し、小テストを出すこともできる。また、コミュニケーション・ツールとして学生間で議論したり、チャットしたりと便利な機能がある。

eラーニングの利点に、地方の小さな学校においても日本語が学べる点がある。遠隔地でもリアルタイムに対話することができる。大会中のポスター発表やパネル発表でも、SNSやYouTubeを活用した学習を扱うものが散見された。

ヘイズ先生は、コンピュータの動画・録音ソフトなどを用いたデジタル・ストーリーテリングの効用を語る。「主に中級クラスで使っています。中級では『郵便局はどこですか?』とか『これはいくらですか?』などの日常会話ができる。でも、自分にとって大事なことを日本語で伝えられるようにはなっていない。学生が自分の物語をつくる過程で、日本語の知識をフルに活用しながら、自分の言いたいことを表現する、かつ聞き手の反応を考慮しつつ伝える能力を養えます。下書きの段階では、言葉の使い方を細かくチェックしながら、学生が自分で日本語の問題点に気づくように促します」

日本滞在がもたらすもの

順風満帆に見えるオーストラリアの日本語教育にも、大きな課題はある。国際交流基金の調査によれば、オーストラリアで語学教育全体の伸びが鈍化して、学習者の意欲が低下しているという。日本語学習も例外ではない。これには語学を学ぶメリットの見えにくさが関係する。

マッコーリー大学でも語学学習サポートを続けている。小山先生は、初等中等教育の活性化の一環として、毎年行うスピーチコンテストを挙げている。これは、中学3年生から一般社会人までが参加し、日本語で発表する大会だ。予算が削られるなかで、マッコーリー大学が中心になって、6大学および教育庁で協力してプログラムを継続しようとしている。

スペンス・ブラウン先生は「若い中等学生にはそもそも『将来の必要』がわからない」と話す。だから語学学習の目標を変え、コミュニケーション以外のメリットを伝えなければならないという。語学学習は、アジア／異文化理解の入り口であり、グローバルな世界を知るために重要な機会だ。日本語でもそれ以外の言語でも、外国語をなにか一つ学ぶことで、応用可能な「語学学習スキル」が身につくと訴える。

学習モチベーションと留学の相関を、アンダーソン先生は自らの経験から話す。「日本に留学して、初めて日本語を学ぶ面白さがわかってきたんです。日本ではわからないことだらけでした。私の場合、それから勉強のやる気が出てきたんです」。だからこそ、オーストラリアの政府や教育機関と、日本の政府や教育機関で個別に行われている留学プログラムをうまく結び合わせることの重要性を説いている。

日本に滞在することのメリットは、若い学習者だけでなく、研究者にも当てはまる。まずは「生の日本語」に24時間触れ、語学が向上する点が挙げられるだろう。加えて、数年おきに日本滞在をするようにしているというマッキー先生は次のように話す。電子ネットワークにより、リアルタイムで日本の情報を得て、コミュニケーションがとれるようになって、実際に日本にいてこそ得られるものがある。公文書や出版物、データや調査結果などの文献だ。インタビューやフィールドワークもできる。さらに、さまざまな研究機関が所蔵する貴重な資料や、日本の研究者がもつ知識を得られる点も大きい。

ヘイズ先生は、日本語教育と日本研究の連携のためにも、日本語を教える人々が、常に現在の日本が抱える問題について勉強していく必要があるという。その重要な手段に、滞在研究があるのはいうまでもない。かつて日本に長く暮らしていたトムソン先生も「日本の感覚を取り戻すために」、本フェローシップの第5回招聘につづき、第9回招聘をうけて日本で研究を行う。



シドニー日本語教育国際研究大会に関連し、同じ時期に「Theatre of dreams, theatre of play nō and kyōgen in Japan」を開催したニューサウスウェールズ州立美術館。

【参考文献】

- アンダーソン、ケント「オーストラリアにおける日本研究の歴史」『をちこち』27、p.42-45、国際交流基金、2009年。
池田俊一「オーストラリアにおける日本研究」、『東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室紀要』、28、p.73-78
池田俊一「オーストラリアにおける日本研究（続）」、『東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室紀要』、35、p.87-95
独立行政法人 国際交流基金編集『海外の日本語教育の現状 2012年度 日本語教育機関調査より』、くろしお出版、2013年。
トムソン木下千尋・牧野成一編『日本語教育と日本研究の連携』、ココ出版、2010年。

Collaborative Link Between Japanese Studies and Japanese Language Education in Australia

Learning Japanese from Primary School

The number of Japanese-language learners in Australia is fourth in the world. This owes much to the “Japanese language boom,” which began in the late 1980s, boosted by the increased demand for practical Japanese in the commercial, legal, and political domains. Australia began shifting its attention from Europe to Asia in the 1960s, and the government implemented the National Asian Languages and Studies in School Program in recent years (2008-09, 2011-12). 96% of Japanese-language learners in Australia are in primary or secondary schools.

Connecting Research and Practice

Many Japanese-language learners in Australia develop considerable skills by the time they enter university. The first university-level Japanese program in Australia was established in 1917. By the 1990s, most universities in the country began offering Japanese language courses.

Japanese language education in Australia emphasizes practical communication skills. Educators aim to foster inter-cultural competence, building skills to understand not only Japanese language, but also Japanese culture, so as to facilitate smooth communication in practical settings.

Japanese Studies supports practice-oriented language education by fostering understanding of the cultural contexts in which the language is used. University students in Australia are required to take research courses in conjunction with language courses. Those who begin studying Japanese for the first time at the university level cannot attain a level of skill sufficient to understand technical discussions in Japanese during their three years of standard undergraduate education. Students who wish to further their studies in specific areas thus pursue an honors degree by spending another year composing an undergraduate thesis. These processes foster sound Japanese communication skills, and help prepare future Japan specialists who will be able to conduct research on Japan without relying on English sources.

Building on Diversity

Japanese Studies scholars and Japanese language instructors in Australia are also diverse, coming from a variety of countries and specialized in a wide range of research areas. Japanese Studies in Australia also plays a role in connecting scholars in Europe and Asia, thanks to the country's historical and geographical background as the meeting point of the two regions. There is also considerable interaction among specialists of various geographical areas within Asian Studies.

Active Utilization of Online Materials

Online instructional materials are used nation-wide in Australia, allowing students to learn Japanese effectively even in rural areas. An educational management system called Moodle provides access to instructional materials and functions as an online communication tool, offering real-time interaction that facilitates the building of communication skills.

Benefits of Spending an Extended Period in Japan

While Japanese language is popular in Australia, overall interest in language learning in general has been on the decline. Dr. Kent Anderson (University of Adelaide) emphasizes the importance of studying abroad for raising the motivation for language studies among students. An extended period of stay in Japan is also beneficial to scholars, as it allows access to valuable materials, enables interviews and fieldwork, and provides opportunities for scholarly exchange with researchers in Japan, in addition to improving language skills. Understanding current issues in Japan is critical not only for Japanese Studies scholars but for Japanese-language instructors, and conducting research in Japan is an important means for staying up to date.

招聘期間中の研究活動

本フェローシップの招聘研究者は、半年または一年間、日本で滞在研究を行う。

ここでは、招聘期間中に財団が提供する研究報告会等のイベントや、研究活動の拠点となる受入機関について紹介する。

The Hakuho Foundation Japanese Research Fellows conduct research in Japan for a period of six months or one year. This section describes events that the Hakuho Foundation arranges for the fellows to participate in during their award periods, such as biannual research report meetings, and provides information on host institutions where the fellows will be based while in Japan.

研究報告会レポート

「国際日本研究フェローシップ」により世界各国から招聘された研究者は、それぞれの受入機関で滞在研究を行うが、来日中の招聘研究者が一堂に会し、研究成果を報告するのが「研究報告会」だ。



▶ 研究報告会では、招聘中の研究成果や今後の展望について発表を行う (写真は第8回)

それぞれの招聘研究者が期間中に行った研究の概要や、そこで得た研究成果の実践活用に関する展望について、日本語で発表が行われる。受入機関の担当教員による補足説明も合わせて行われ、各招聘研究者が、いかに受入機関の特長や担当教員と連携をはかり、より自身の研究を深化させてきたかが伝わる。

研究発表には、本フェローシップの審査委員も参加。発表内容に関する質疑応答が行われた。日本語・日本文化研究のそれぞれの専門領域のクロスオーバーが起き、活発な議論が展開された。

報告会の終了後は、交流会が行われた。各受入機関や審査委員も交え、国籍や専門領域を超えた、様々な交流が生まれる場だ。過去、こうした研究報告会によって生まれた交流が、帰国後の共同研究や研究協力に発展するケースもあったという。

博報財団では、年に2回の研究報告会に加え、懇談会・懇親会も設け、年に数回、研究領域を超えた交流イベントを開催している。なお、短期招聘研究者は最終報告1回、長期招聘研究者は中間・最終報告の2回、研究報告を行う。また、招聘研究者は、招聘期間終了後1ヶ月以内に、研究の「成果報告書」を財団に提出することが義務づけられている。過去の招聘研究者の成果報告書の概要は財団ホームページから閲覧できる。



▶ 招聘開始時に開催する懇談会で、これから日本で研究するテーマなどを自己紹介する招聘研究者たち (いずれも第9回)

Summary of the Research Report Meeting

Fellowship recipients present their research outcomes at biannual research report meetings. Short-term fellows present once during their fellowship period, and long-term fellows present twice.

At the meeting in August 2014, fellows presented on the content, results, and future practical applications of their research in Japanese. Reports by scholars from host institutions illustrated the value of collaborative work conducted at institutions appropriate for each fellow. A question-and-answer session with fellowship selection committee members led to lively discussions crisscrossing various research areas. The reception after the meeting facilitated networking, which in the past has subsequently led to collaborative research. Final reports are submitted by fellows within a month after the end of their fellowship periods, and are posted on the Foundation website.



審査委員長 井上 優 (麗澤大学 教授)

日本語・日本文化研究の国際化とは、日本語・日本文化の研究がそれぞれの国の言語研究・文化研究の中で一定の地位を占めることです。「国際日本研究フェローシップ」はそのために重要な役割を果たすものです。招聘研究者のみならず、

報告会などの場を通じて、自国の日本語・日本文化研究の現状や他の領域との交流の様子を日本の研究者に知らせてほしいと思います。そして、帰国後は、日本の研究の現状を自国の他領域の研究者に知らせるとともに、日本語・日本文化という枠を超えて研究を進められることを期待します。

The Japanese Research Fellowship makes an important contribution to promoting the significance of Japanese language and culture in the fields of linguistic and cultural research across the world. I hope the fellows will inform scholars in Japan and in their home countries of the current state of research on Japanese language and culture and its intersections with other research fields in respective countries, and will advance their own research beyond the framework of Japanese language and culture.

Fellowship Judging Panel Chair,
Masaru Inoue (Professor, Reitaku University)



▶ 招聘研究者同士や受入機関と交流できる立食形式の懇親会 (第9回)



▶ 研究報告会の出席者による集合写真 (第9回)

本フェローシップの受入機関

本フェローシップでは、7つの受入機関のなかから、招聘研究者の研究内容・目的に合致した機関で研究を行うことができる。ここでは、7つの受入機関について、それぞれの特徴を紹介する。

The Hakuho Foundation Japanese Research Fellows are affiliated with host institutions with characteristics that match the content and the objectives of their research. This section illustrates the features of the seven host institutions.

京都大学 Kyoto University



京都府京都市左京区吉田本町
<http://www.kyoto-u.ac.jp>

伝統と独創性が 両立する学風のもと、 充実した研究を

1897年創立、京都府内に3つのキャンパスを持ち、自由な学風と卓越した研究成果で知られる京都大学。本フェローシップでは、第9回から受け入れを開始した。

京都大学では、国際戦略「2x by 2020」を提唱。①教育研究の伝統②京都という土地の文化的蓄積③京都大学ならではの独創力、の3点を原動力に、研究・教育・国際貢献でそれぞれ目標を定め、グローバル化を推進していく。海外研究者の受け入れ拡大も目標のひとつに掲げている。滞在環境のさらなる整備が期待できるだろう。

招聘研究者は、受入担当教員の所属先での受け入れとなる。学内で研究活動を行うにあたり、学内書架やデータベースが利用できる正式な身分を与えられるため、スムーズな研究が可能となる。

国際交流サービスオフィスでは、在留資格認定証明書の代理申請や、生活支援のためのサポートを行っている。また国際交流センターでは、研究者の日本語能力の向上のバックアップも行われるという。

土地と歴史に根付いた ユニークな研究内容

京都大学での研究の特徴のひとつとして、各部局が独創性の高いユニークな研究を行っていることが挙げられる。

たとえば「京都学」と呼ばれる、京都を対象とした研究。「京野菜」や「町家」^{まちや}「お

もてなし」など、京都ならではの歴史や伝統に根付いた文化を対象に、農学や環境学など、様々な分野で研究が行われる。あるいは藤原定家の『明月記』。これまで主に文学・歴史学の研究素材であったこの資料の天体現象記録を、最新の天文学研究において事実確定の指標として再評価し、展示により表現する試みも行われた。



京都大学総合博物館で2014年に展示された、『明月記と最新宇宙像』展

文化と伝統が息づき、観光地として栄える京都という土地と、最新の学問がクロスオーバーする研究は、研究の視野を広げる新たな刺激に満ちている。

学際的共同研究プロジェクト

また近年、学際融合教育研究推進センター主導で、複数の学問領域を横断する、部局横断的な教育研究プロジェクト「ユニット」を形成する動きが活発だ。9つの部局が交わった「アジア研究教育ユニット」もそのひとつだ。従来の日本研究と比べて、よりグローバルな視点で「アジアから見た日本」を多角的に研究。アジア諸国とどう相互理解を果たし、連携していくか、学際的な視点から教育研究事業を行っている。

こうした「ユニット」には、もちろん招聘研究者も参加可能だ。様々な分野の研究者が集う、部局の枠を超えた組織（ユニット）に参加することで、複層的なつながりが生まれていくという。

森真理子国際交流センター長は、自身も古典文学研究者。「本フェローシップの対象となる日本文化・日本文学研究者にとって、京都大学に所蔵された資料に直接触れられることのメリットはとても大きい」と語る。また、歴史ある京都大学のこれまでの研究の蓄積も、研究の幅を広げてくれるに違いない。

本フェローシップでは、招聘研究者を通じ

「日本文学・日本文化研究は『日本にいてからできる』という分野ではありません。つねに『外からの視点』を大事にしています。その視点をもたらず海外研究者の存在に期待しています」と語る森真理子国際交流センター長



た海外の他大学との連携や、研究者間の学術交流、共同研究にも期待しているという。

培ってきた伝統と、独創性を尊重する校風。京都大学での滞在研究は、自身の研究をよりいっそう深化させてくれるに違いない。

Productive Research in an Academic Environment where Tradition and Originality Coexist

Established in 1897, Kyoto University is known for its liberal academic tradition and outstanding research. The University began accepting Hakuho Foundation fellows in 2014. The university's international strategy sets objectives in the areas of research, education, and international contribution, and increasing visiting scholars from abroad is one of its goals. Fellows can access library resources and databases, obtain assistance regarding practical matters, and receive support for improving their Japanese language skills.

Research conducted at Kyoto University is highly innovative and unique. The Kyoto Studies Program, for example, examines Kyoto from the perspectives of diverse disciplines. The intersection of culture and tradition with cutting-edge academic research provides fresh inspiration for expanding academic horizons.

Kyoto University's interdisciplinary research has been particularly dynamic in recent years, led by cross-disciplinary units conducting multilateral research on a variety of themes, such as "Japan through Asian perspectives." Fellows can participate in these units and build multi-layered networks with scholars in diverse fields.

Professor Mariko Mori, the director of the International Center and a scholar of classical literature, comments that having first-hand access to the valuable materials held at the university is tremendously beneficial to scholars of Japanese culture and literature.

By hosting Hakuho Foundation fellows, the university hopes to expand its partnerships with universities abroad and boost scholarly exchange and collaborative research.

Kyoto University's rich tradition and promotion of originality are poised to add depth to visiting scholars' research.

国立国語研究所

National Institute for
Japanese Language and Linguistics

東京都立川市緑町 10-2

<http://www.ninjal.ac.jp>

大学共同研究機関としての 豊富なリソース

第1回より受入開始



国立国語研究所は大学共同研究機関である。日本全国の国公私立大学の研究者のため

の学術研究の中核拠点として、研究活動と社会貢献活動を行っている。

同研究所の業績を特徴づけるのが、コーパス（自然言語を構造化し大規模に集積したもの）の開発と研究だ。ウェブサイトでは、1億語を超える「現代日本語書き言葉均衡コーパス」など、共同研究の成果物である日本語コーパスを多数公開。そのほか、消滅危機方言の調査と保存のための総合的研究や方言地図の公開など、個別の大学では実施の難しい共同研究を行っている。

招聘研究者は「外来研究員」として、蔵書やデータベースを閲覧できる。招聘期間中には、研究発表会での発表が求められるほか、論文集への投稿資格が付与される。また、国内外の研究者による定期的な講演会、共同研究プロジェクトの研究発表会など、他の研究領域の研究者との交流の機会も多数用意されている。

同研究所の豊富なリソースを利用したそれぞれの研究の深化と、やがて海外の日本語・日本語教育学研究の活性化が期待される。

The Exceptional Resources of an Inter-University Research Institute

The National Institute for Japanese Language and Linguistics has excelled in the development and analysis of Japanese language corpora, and conducts large-scale research possible only for an inter-university research institute. Fellows can access the institute's rich library resources and databases, submit papers to the institute's publications, and engage in scholarly exchange through lectures and forums. The institute hopes to enhance fellows' research with its rich resources, and to galvanize Japanese language research abroad.

国際日本文化研究センター

International Research Center for Japanese Studies

京都府京都市西京区御陵大枝山町 3-2

<http://www.nichibun.ac.jp>

知見を深める共同研究で、 研究の幅を広げる

第9回より受入開始



国立の大学共同利用機関である、国際日本文化研究センター。

招聘研究者の受入窓口となる海外研究交流室では、受け入れの手続きから研究上の相談、滞在期間の日常生活の相談まで、一貫して対応を行っている。

招聘研究者は「外来研究員」の資格で研究を行う。海外から来た研究員のための宿泊施設「日文研ハウス」もある。

同センターが最も重点を置く「共同研究」では、1つのテーマを、社会学や言語学、歴史学、文学など様々な分野の研究者同士で議論することで、それぞれの専門が相対化され、より多角的な知見が得られる。

さらに各種セミナーや講演会など、研究者同士や、地域との交流を深める機会が多い。研究の場を越えた人脈拡大を重視するこうした方針により、招聘中に新しい研究テーマを発見する研究者も多い。

最近では、漫画や現代音楽、日中医学史など様々な分野の研究者が海外から集まっている同センター。招聘研究者には、学術交流を通じた研究者同士の切磋琢磨と、海外での日本研究の発展を期待しているという。

Expanding the Breadth and Depth of Research through Collaboration and Cross-Disciplinary Exchange

The International Research Center for Japanese Studies is a national inter-university research institute. The center's primary focus is on collaborative research, in which scholars of diverse disciplines examine shared themes, producing comparative and multilateral knowledge. The center values networks beyond research contexts, and offers abundant opportunities for interaction among scholars and with local residents. The center encourages scholarly exchange and friendly rivalry among researchers, and hopes for the further development of Japanese Studies outside Japan.

お茶の水女子大学

Ochanomizu University

東京都文京区大塚 2-1-1

<http://www.ocha.ac.jp>

海外の日本語教育研究者に 寄せる期待

第4回より受入開始



かねてより、日本語教育研究に重点を置いているお茶の水女子大学。とくに東南アジアや

中東欧など、今後の日本語教育研究の発展が期待される地域の研究者に対し、来日滞在による研究の深化を期待しているという。

招聘研究者には、学内に研究室が用意され、希望に応じて、キャンパスに併設された单身宿舎に入居することが可能だ。また、期間中の公開講演会での発表、国際合同授業への参加などを通じて、同大学の教員との情報ネットワークも強化されている。アットホームで密度の高い交流環境は、これまでの招聘研究者からも評判が高い。

こうした交流は、招聘期間終了後の研究者同士のネットワークを形成し、さらに大学同士の国際交流協定締結などの国際交流の促進にも寄与しているという。同大は「グローバル人材育成推進事業（全学型）」に採択されており、今後キャンパスのグローバル化をさらに推進していくという。

今後も本フェローシップを通じ、海外での日本語教育研究の発展と、世界規模の交流拡大を期待しているようだ。

Supporting Foreign Researchers for the Future of Japanese Language Education

Ochanomizu University has promoted research on Japanese language education for many years. By assisting foreign scholars conducting research in Japan, the university hopes to enhance the development of the field, particularly in the regions where there are prospects for future growth of the discipline. The university supports fellows by providing offices, organizing public lectures and international joint classes, and facilitating networking with faculty members. These efforts have expanded scholarly networks and have led to institutional partnerships with universities abroad.

東京外国語大学

Tokyo University of Foreign Studies

東京都府中市朝日町 3-11-1

<http://www.tufs.ac.jp>

世界各国の多様な視点による日本語・日本学研究

第 6 回より受入開始



日本有数の外国語大学である東京外国語大学は、日本語を含む 27 専攻語・地域につい

ての教育研究体制を擁する。招聘研究者の受入先となる国際日本研究センターは、国内外における日本語学習者の多様化に対応した日本語教育の推進に寄与するため設置された。日本語、日本学、対照研究等を行う 5 つの部門で構成されている。

招聘研究者には、受入担当教員の指導のみならず他のセンター教員の授業やゼミの聴講、資料提供、常駐の事務局スタッフによるニーズ対応など、積極的なバックアップ体制が取られている。

同センターでは年間に多くの国際シンポジウムや講演会、研究会などを開催。とくに国内外の講師を招いて行う夏季セミナーは好評だ。また、プロジェクトや協働研究を通して、研究者同士のネットワークづくりも進めている。

招聘研究者には、従来の日本語・日本学研

究を踏まえつつ、独自の視点に基づいた研究を期待するとともに、多くの研究者との交流によって、自らの研究を発展させていくことを願っているという。

Promoting Research on Japanese Studies through Diverse Perspectives from around the Globe

Tokyo University of Foreign Studies boasts education and research on 27 languages and geographic regions. The International Center for Japanese Studies promotes Japanese language education, serving the diverse needs of students of Japanese language in and outside Japan. Fellows can attend classes, obtain materials for their research, develop scholarly networks through projects and collaborative research, participate in international symposiums and workshops, and develop creative research through the interaction of diverse perspectives.

立命館大学

Ritsumeikan University

京都府京都市北区等持院北町 56-1

<http://www.ritsumei.jp>

先進的研究機関で、学際的な日本文化研究を

第 10 回より受入開始



グローバル研究大学を目指し、2014 年には文部科学省の「スーパーグローバル大学創

成事業」にも採択された立命館大学。

人社系分野で、特に先進的領域の研究機関として注目されるアート・リサーチセンターでは、京都を中心とした伝統文化研究や、文化財のデジタル・アーカイブ化などが行われる。文理融合型の研究手法を用いて、デジタル・ヒューマニティーズの日本における重要研究拠点となっている。京都にしながら海外の美術館や研究機関と共同プロジェクトを展開できることが特徴だ。

文学研究科では、これまで海外の日本研究者を多く受け入れてきた。日本研究のセクションを持つ海外の研究機関、大学と連携したプロジェクト研究や、国際シンポジウム、ワークショップ開催も多数の実績がある。今後、日本研究に特化した独自の研究体制の充実と、海外との連携を活かした本格的な日本研究の機関としての活動を志向するという。

招聘研究者は、「客員協力研究員」として、同大学の教員と同程度の便宜供与が受けられる。2016 年には、研究設備も整った新図書館が完成。伝統とテクノロジーが融合した研究機関は、招聘研究者が行う日本文化研究の幅を広げてくれるに違いない。

Interdisciplinary Research on Japanese Culture at a Progressive Research Institution

Aspiring to become a global research institution, Ritsumeikan University has collaborated on numerous projects with research institutes and universities abroad. Its Art Research Center has become an important hub for digital humanities projects in Japan, developing digital archives of cultural assets and conducting research that merges the methods of the humanities and the sciences. This innovative research institution, where tradition and technology converge, is sure to expand visiting scholars' breadth of research on Japanese culture.

早稲田大学

Waseda University

東京都新宿区西早稲田 1-7-14

<http://www.waseda.jp>

国内最大規模の外国人研究者受入体制

第 4 回より受入開始



日本を越え、世界に通用するグローバルユニバーシティを目指す早稲田大学。創立当初から留学生を積極的に受け入れてきた歴史を

持ち、現在では毎年約 200 名を越える外国人研究者を受け入れている。専属スタッフによるサポート体制と、宿舎や研究室など、都心のキャンパスでの研究に関わる環境を整え、さらなる外国人研究者の受入体制の整備を進めているという。

招聘研究者の受入手続、寮や研究室等の手配を行う同大の国際部国際課では、外国人研究者交流会や、日本文化を体験できる機会を企画するなど、コミュニティ作りと情報交換がしやすい環境を用意している。

本フェローシップでは、日本語教育研究科、又は文学研究科が受入先となる。招聘研究者には滞在期間中、身分証明書や個人メールアドレスが付与され、図書館などの資料やデータベースへのアクセスが可能となる。とくに人文系では、国内外の貴重な演劇・映像資料を集めた演劇博物館を目的に来日する研究者も多いという。

国内最大規模の大学ならではの、外国人研究者へのサポート体制で、快適で充実した研究環境が期待できるだろう。

One of Japan's Largest Hubs for International Researchers

Waseda University aspires to become one of the world's leading global universities. Having welcomed scholars from abroad since its establishment, the university accepts over 200 international scholars every year. Fellows can access the university's libraries and databases, including its valuable collections of theatre and visual materials. Networking and cultural events are held regularly to facilitate community-building and scholarly exchange. The university's well-equipped structures of support provide international scholars with a comfortable and productive research environment.

世界における日本語・日本語教育研究および日本文学・日本文化研究の拡大、振興を図ります。

博報財団「国際日本研究フェローシップ」

本フェローシップは、海外で日本語・日本語教育・日本文学・日本文化に関する研究を行っているすぐれた研究者を日本へ招聘し、滞在型研究の場を提供することで、世界における日本研究の基盤をより充実させ、研究者の活動を通じて、日本への理解を深めることを目的としています。

Advancing international research into the Japanese language, Japanese language education, Japanese literature and Japanese culture.

Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship

With the goals of further strengthening the fundamentals of international research into Japan and deepening international understanding of Japan through researchers' activities, the Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship invites leading international researchers of the Japanese language, Japanese language education, Japanese literature and Japanese culture to Japan to conduct residential research.

【対象となる研究】

- 日本語・日本語教育研究
- 日本文学・日本文化研究

【応募資格】

海外在住の日本語・日本語教育・日本文学・日本文化の研究者
(下記の条件を全て満たす者)。

- 高等教育機関・研究機関に所属していること (PD・非常勤を含む)。あるいは、それに相当する研究教育歴を有すること。
- 日本語で研究・交流を遂行するのに十分な日本語能力を有すること。
- 日本以外に在住し、日本以外の国籍を有すること。あるいは、日本国籍で日本以外の国におおむね 10 年以上在住し、当該国の学会などで活躍していること。
- 招聘期間中継続して日本に滞在することが可能であること。

【助成の内容】

- 渡航費、滞在・研究費、住居費など日本での研究に必要な経費を負担します。
- 研究期間は長期 (12 ヶ月) と短期 (6 ヶ月) が選択できます。
- 年間の招聘研究者数は 15 人程度の予定です。

【来日中の研究活動】

下記のいずれかの受入機関の協力を得て、研究を行います。

- 国立国語研究所
- 国際日本文化研究センター
- お茶の水女子大学
- 京都大学
- 東京外国語大学
- 立命館大学
- 早稲田大学

詳しくは、下記ホームページをご確認ください。

<http://www.hakuhodo.co.jp/foundation/program/>

本フェローシップに関するお問い合わせ

博報財団「国際日本研究フェローシップ」事務局
〒105-0012 東京都港区芝大門 2-1-16 芝大門 MF ビル B1 階
(株)イーサイド内
TEL: 03-6435-8140 / FAX: 03-6435-8790
Email: ip-office@hakuhofoundation-ip.jp

博報財団  子どもたちと、未来のあいだに
HAKUHO FOUNDATION

Eligible research

- Japanese language and Japanese language education research
- Japanese literature and Japanese culture research

Eligible researchers

Researchers working in the fields of Japanese language, Japanese language education, Japanese literature or Japanese culture who reside outside Japan and meet all of the criteria below.

- Affiliated with a higher education or research institution (including postdoctoral scholars and adjunct professors), or have equivalent research and educational background
- Have sufficient Japanese language proficiency to be able to conduct research and interact in Japanese
- Non-Japanese national residing outside Japan or Japanese national who has resided outside Japan for 10 years or more and been active in the academic community, etc. of their country of residence
- Able to stay in Japan continuously for the duration of the Fellowship period

Fellowship content

- Airfares, residential research expenses, housing subsidy and other expenses necessary for conducting research in Japan
- Long-term (12-month) and short-term (6-month) fellowships are available
- Around 15 fellows will be invited each year

Receiving organizations

Invited fellows will conduct their research with the cooperation of one of the following receiving organizations:

- International Research Center for Japanese Studies
- Kyoto University
- National Institute for Japanese Language and Linguistics
- Ochanomizu University
- Ritsumeikan University
- Tokyo University of Foreign Studies
- Waseda University

Refer to the Application Guide for full details

<http://www.hakuhodo.co.jp/foundation/english/program/>

Contact

Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship Secretariat
c/o e-side, Inc., B1 Fl., Shiba-Daimon MF Bldg., 2-1-16 Shiba-Daimon, Minato-ku, Tokyo 105-0012, Japan
Tel: +81 3 6435 8140 Fax: +81 3 6435 8790
Email: ip-office@hakuhofoundation-ip.jp

発行日：2015年6月10日

発行：公益財団法人 博報児童教育振興会

編集：早稲田文学編集室 窪木竜也 北原美那 朴文順

編集協力：早稲田大学 十重田裕一 市川真人

翻訳・英文編集：常田道子 デザイン：奥定泰之 (オクサダデザイン)